第35回 名古屋クラシックフェスティバル

フィリップ・ジョルダン 指揮
ウィーン交響楽団

© Bubu Dujmic

この世代の指揮者は面白い！

©Jean Francois Leclercq

ベートーヴェン
交響曲 第5番「運命」 ハ短調 op.67

ブラームス
交響曲 第1番 ハ短調 op.68

2017 11/28(火) 6:45pm

日本特殊陶業市民会館フォレストホール

S ¥22,000　A ¥19,000　B ¥15,000　C ¥12,000　D ¥9,000　学生 ¥2,500(税込)

学生券　ご希望の方は中京テレビ事業ホームページよりエントリーしてください。
公演1か月前に抽選の上、お席をお取りできるか否か登録メールアドレスへご連絡いたします。
エントリー開始は一般発売日以降となります。

※プログラム、出演者等変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。
※未就学児のご入場はご同伴の場合でもお断りいたします。

主催：CHUKYO TV　企画・運営：中京テレビ事業

お問合せ お申込み　**中京テレビ事業 ☎052-588-4477**
(月～金 10:00～17:00／土・日・祝日休業)

http://cte.jp/ 中京テレビ事業 検索

座席表からお席をお選びいただけます！

5/27(土) 10:00～ 一般発売

チケット販売所

中京テレビ事業チケットセンター	052-320-9933
チケットぴあ（Pコード 326-977）	0570-02-9999
ローソンチケット（Lコード 43828）	0570-084-004
愛知芸術文化センターPG	052-972-0430
栄プレチケ92	052-953-0777
e+（イープラス）	eplus.jp
名鉄ホールチケットセンター	052-561-7755

セブン-イレブン、サークルK、サンクス、ローソン、ミニストップ、ファミリーマート店頭

ジョルダンが聴衆を熱くする、ウィーン響の覚醒と新時代!

©Stefan Olah

ウィーン響　かつてない高みに～質感あふれる響き、粋な歌心

楽都のオーケストラ・シーンを彩るウィーン交響楽団が、変わった。ムジークフェラインとコンツェルトハウスをベースに、夏はボーデン湖畔のブレゲンツ音楽祭でオペラとシンフォニーに腕を揮う「ヴィーナー・シンフォニカー」。近年は、刺激的なオペラを上演するアン・デア・ウィーン劇場でも創造の一翼を担うようになった。素晴らしい。

サウンドもマインドも今、かつてない高みにあるのではないか。自慢の質感あふれる響き、重みに粋な歌心が添えられた、と褒め言葉を連ねておこう。この「粋な歌心」の箇所は「鮮やかな音彩」でも「大胆な語り口」でも構わない。

スイス出身の指揮界の貴公子でパリ・オペラ座の要職にあるフィリップ・ジョルダンが、ウィーン交響楽団の首席指揮者に就任し、早3年。メンバーの世代交代や近年のゲスト指揮者たち――パーヴォ・ヤルヴィ、ロレンツォ・ヴィオッティ、テオドール・クルレンツィス、ステファヌ・ドヌーヴ、クシシュトフ・ウルバンスキらの刺激的なタクトが功を奏し、ウィーン響はここへてきて、私たちが漠然と思い描くウィーンの保守的なオーケストラではなくなった。もちろん老舗としての型や誇りは健在だ。

オーケストラ、オペラ、バレエ音楽の世界を嬉々として行き来するマエストロ、フィリップ・ジョルダン、今年秋に44歳になる。

2014年の晩秋に「未完成」、ヴォルフのオーケストラ歌曲、ブルックナーの交響曲第1番という「生粋」のウィーン・プログラムをウィーン響で披露して以来、この街での人気、評価は本物だ。「悲愴」や「くるみ割り人形」、それに「青ひげ公の城」の妖しくも烈しい演奏を思い出す。

昨年来、フィリップ・ジョルダンとウィーン響はベートーヴェンとバルトークのシリーズ、マーラーの交響曲などを通じ、存在感をアピール。その流れを生かしたドイツ・オーストリアの名曲を暮れのステージで披露することになった。

作品67と68 - -のいずれもハ短調からハ長調への構成をもつ- -交響曲にも新たな光が差し込むに違いない。

今をときめくフィリップ・ジョルダン、さあ出番だ。

奥田佳道（音楽評論家）

ウィーン交響楽団　*Wiener Symphoniker*

首席指揮者：フィリップ・ジョルダン
名誉指揮者：ジョルジュ・プレートル、ヴォルフガング・サヴァリッシュ（故人）

ウィーン交響楽団は、ウィーンの文化大使かつ最高レベルのコンサート・オーケストラとして、オーストリアの首都の音楽シーンを形成するオーケストラ活動の中で、とりわけ重要な役割を果たしている。ウィーン交響楽団の様々な活動の中心を占めているのは、伝統的なウィーンの音楽をさらに洗練させるという重要な目的を踏まえた革新的なプロジェクトである。

1900年10月、“ウィーン・コンサート・ソサエティ（ウィーン・コンツェルトフェライン）”という名称のもとに誕生したオーケストラは、フェルディナンド・レーヴェの指揮により、ウィーン楽友協会で初めての公演を行った。ブルックナーの交響曲第9番、シェーンベルクの「グレの歌」、ラヴェルの左手のためのピアノ協奏曲、フランツ・シュミットの「7つの封印の書」等は、今日ウィーン交響楽団の主要なレパートリーであることに議論の余地がないが、これらはいずれも同楽団が初演を行った作品である。ウィーン交響楽団の歴史を通して、ブルーノ・ワルター、リヒャルト・シュトラウス、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、オズヴァルト・カバスタ、ジョージ・セル、ハンス・クナッパーブッシュといった数々の巨匠たちが、同楽団に多大な影響を与えた。次の数十年間では、首席指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤン（1950～60年）とヴォルフガング・サヴァリッシュ（1960～70年）が、オーケストラの音色作りにおいて最も重要な役割を果たした。その後、首席指揮者には、ヨーゼフ・クリップスが短期間ながらも再び就任し、カルロ・マリア・ジュリーニとゲンナジー・ロジェストヴェンスキーがそれを引き継いだ。ジョルジュ・プレートルは1986年から91年まで首席指揮者を務め、それにラファエル・フリューベック・デ・ブルゴス、ウラディーミル・フェドセーエフ、そしてファビオ・ルイジが続いた。

客演指揮者としては、レナード・バーンスタイン、ロリン・マゼール、ズービン・メータ、クラウディオ・アバド、セルジュ・チェリビダッケといったスターたちが、ウィーン交響楽団との共演で数々の注目すべき名演を残してきた。

2014／2015シーズンの始めには、スイス人の指揮者、フィリップ・ジョルダンが首席指揮者に就任し、ウィーン交響楽団を新たな時代へと導いている。以来、同交響楽団は、主要な作曲家の作品、現代音楽、アーティスト・イン・レジデンスとのコラボレーション、熱心な音楽教育活動など、周期的にそれぞれのテーマに特に重点を置いた取り組みを行っている。

ウィーン交響楽団は、1シーズンにつき150以上のコンサートやオペラ公演をこなしている。そのうちの大多数は、ウィーン楽友協会とウィーン・コンツェルトハウスという、有名なコンサート・ホールで行われており、これに加え、非常に内容が充実した広範囲におよぶツアーが行われている。　ウィーン交響楽団は、1946年からブレゲンツ音楽祭のレジデント・オーケストラを務めている。同音楽祭では、プログラム中の大多数のオペラ公演やオーケストラ・コンサートに出演している。さらに2006年からは、新たな活動にも取り組んでいる。この年は、アン・デア・ウィーン劇場がオペラハウスとして再建された年であるが、以来ウィーン交響楽団は、同劇場のオペラ公演に数多く参加している。

©Johannes Ifkovits

フィリップ・ジョルダン　*Philippe Jordan*

現在、パリ・オペラ座の音楽監督とウィーン交響楽団の首席指揮者を兼任しているフィリップ・ジョルダンは、同世代の中で最も才能に恵まれ、聴衆を熱くする指揮者の一人として確固たる地位を築いている。

彼のキャリアは、1994／1995シーズンに、ウルム市立劇場のカペルマイスターとなったことに始まる。1998年から2001年までは、ベルリン国立歌劇場でダニエル・バレンボイムのアシスタントを務めた。2001年から2004年までは、グラーツ歌劇場とグラーツ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者を務めた。この間、彼は世界中の一流オペラ・ハウスや音楽祭にデビューを果たした。主なものとしては、ヒューストン・グランド・オペラ、グラインドボーン音楽祭、エクサン・プロヴァンス音楽祭、ニューヨーク・メトロポリタン・オペラ、英国ロイヤル・オペラ・ハウス、ミラノ・スカラ座、ミュンヘン・バイエルン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭（《コジ・ファン・トゥッテ》）、ウィーン国立歌劇場、バーデン＝バーデン祝祭劇場（《タンホイザー》）、チューリッヒ歌劇場、バイロイト音楽祭（《パルジファル》）などである。2006年から2010年までは、ベルリン国立歌劇場の首席客演指揮者を務めた。

これまでに共演したオーケストラとしては、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン国立歌劇場管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニア管弦楽団、マーラー室内管弦楽団、ハンブルク北ドイツ放送交響楽団、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団などがある。

最近のCDとしては、ヴェルディの《レクイエム》と、ワーグナーの《ニーベルンクの指環》からの抜粋（管弦楽作品集）の2つのアルバムがある。これらは、いずれもパリ国立歌劇場管弦楽団との共演で、エラート・レーベルからリリースされている。ウィーン交響楽団との録音では、これまでにチャイコフスキーの交響曲第6番《悲愴》（2014年9月にリリース）と、シューベルトの交響曲第7（8）番《未完成》と第8（9）番《グレート》（2015年8月にリリース）がある。